

EBM時代を生き抜くために

徳島赤十字病院 小児科 宮本 尚幸

医学の世界は日進月歩である。医学情報の電子データベース化とインターネットの発展により、我々は非常に手軽に最新の医学情報にアクセスできるようになった。これにより、根拠にもとづく医療（evidence-based medicine, EBM）が日本においても現代医学の基本的あり方となっている。EBM時代を生きる我々臨床医は、自らの専門分野の最新情報を熟知して診療を行うことを求められており、論文を読むということは身体所見の取り方や注射の仕方と同様に医師としての必須技術となっているといっても過言ではないと思う。

論文を読むという行為は能動的な行為であるべきだと思う。近年、特に政治の世界でフェイクニュースが世間を騒がせている。嘘の情報でもメディアにそれらしく書かれてしまうと、人は簡単に信じてしまって嘘情報に振り回されてしまうものだ。医学界において、それを防ぐための機構が医学雑誌におけるpeer reviewだ。しかし、peer reviewを通った論文でも多くのデータは再現不能で、真実ではないことが多いと聞く。投稿料で荒稼ぎしようとする、いわゆるハゲタカジャーナルも少なくなく、十分な査読がされていない論文も多いのだ。医学情報を臨床に還元する臨床医にはデータを批判的に読むという技術が求められている。

皆さんは論文を読むとき、どこに注目しているだろうか。私は医師になりたての頃はabstractとdiscussionから読んでいた。著者が自身のデータを既報のレビューをつけて解説してくれていることが多く、読みやすいのだ。しかし、当然ながら論文において最も重要な部分はmethodであり、その次がresultなのだということに、大学院で自身が研究をして論文を書く立場になってから実感を持って気づいた。ただmethodを読み解くというのは実は簡単ではないと思う。専門的な解析方法など難しい言葉も多いし、どういう点に着目して読めばいいのかも最初は分からなかった。このような解析方法の知識やデータの妥当性の評価方法というのは臨床現場では身につかない。

近年、様々な学会において専門医取得の条件に論文執筆が必須となってきている。なぜ臨床医が論文を書かなくてはならないのか。私は論文を書くという行為が、最新の医学論文の内容をきちんと理解し、臨床に還元するという現代臨床医の基本技能を磨く上で非常に有効な行為だからだと思う。とくに研修医の先生方にはまずは本誌を足掛かりに論文を書くということを初めてもらい、EBM時代の医師に必要な技能を身につけてもらいたい。